

令和 8 年 7 月 10 日

令和 7 年度 特別の教育課程の実施状況等について

愛媛県		
学 校 名	管理機関名	設置者の別
鬼北町立広見中学校	鬼北町教育委員会	公立

1. 学校における特別の教育課程の編成の方針等に関する情報

学 校 名	特別の教育課程の編成の方針等の 公表 URL
鬼北町立広見中学校	https://hiromi-j.esnet.ed.jp/file/10459

2. 学校における自己評価・学校関係者評価の結果公表に関する情報

学 校 名	自己評価結果の公表 URL	学校関係者評価結果の公表 URL
鬼北町立広見中学校	https://hiromi-j.esnet.ed.jp/self-evaluation	https://hiromi-j.esnet.ed.jp/self-evaluation

3. 特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

(1) 特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

☒ 計画通り実施できている

☐ 一部、計画通り実施できていない

☐ ほとんど計画通り実施できていない

(2) 実施状況に関する特記事項

教育課程特例校制度による「地域コミュニケーション科」の授業を実施するにあたり、教育長より、校長、教頭、学年主任等がこの学習の価値について説明を受けた。そのうえで校長の学校経営方針に沿いながら、地域コミュニケーション科主任が中心となり、各学年部における体制を構築し、地域コーディネーターの機能も生かしながら、本教科の計画的な取組を実施した。

(3) 保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

☒ 実施している

☐ 実施していない

<特記事項>

学習の様子を学校ホームページに公開したり、新聞やテレビなどのメディアを活用したりすることで、広く地域住民等の理解を得ている。また、学年通信で保護者に情報提供したり、学校運営協議会において、本校の取組を紹介・報告したりする場を設けている。

4. 実施の効果及び課題

(1) 特別の教育課程の編成・実施により達成を目指している目標との関係

ア 第1学年「ふるさと鬼北町の魅力を実感できる教育の創造」

「ふるさと再発見ツアー」や「ふるさとワークミーティング」の活動を通して、地域の歴史、産業、伝統文化等に関わる人々と交流することで、地域をより広く深く知るとともに、その人々の生き方、考え方を学ぶ。

イ 第2学年「地域と連携した教育活動の推進」

「トラストミーティング」「Uターン学習」「ネクストリーダーズミーティング」「コミュニケーション力育成セミナー」「つながりトークライブ」の学習活動を通して、地域の人々との交流を広げ、地域のよさを知り、地域貢献の意義と喜びを体感する。

ウ 第3学年「夢をはぐくむライフキャリア教育の推進」

「くるまざ♡ミーティング」「ドリームアップミーティング」「働く人々の笑顔の写真展」「マナーレベルアップセミナー」の活動を通して、自らの生き方を考えるとともに、働く人々の思いに触れる学習活動を通して、多様な価値観を感じ取る。

以上の取組を通して、探究的な見方や考え方により、地域の歴史、産業、伝統文化、自然等を見聞きする中で、それらに関わる人々の思いを知り、地域に生きる人々との交流を通して、生き方を学ぶとともに、コミュニケーション能力の向上を図るなど、これからの時代に必要な資質・能力を育成することができた。

しかし、学校評価において、「地域での体験活動や地域の行事等に、積極的に参加している。」という問いに対して、26.5%の生徒や保護者が地域の行事に参加できていない状況が見られるため、様々な働き方を模索し、地域とのつながりを意識させていく必要がある。

(2) 学校教育法等に示す学校教育の目標との関係

年間 30 時間の生き方に学ぶ「地域コミュニケーション科」の取組は、校内だけにとどまらず、小学生とのコミュニケーションをはじめ、大学生や地域住民等の力を借りて、生徒たちに郷土愛や将来への希望を与え、自信を持って社会へ送り出せる子供たちの育成につながっている。その結果、学校評価において、「楽しく充実している」と答えた生徒は 98%、「将来の夢や目標を持って、楽しく学校生活を送っている。」と答えた生徒は 89%、「夢や目標を持たせ、実現できるよう努力させるような指導ができています。」と答

えた教職員は 100%であり、学校教育目標の「郷土に誇りを持ち、たくましく生き抜く生徒の育成」に向けた教育活動において、高い評価を受けている。

5. 課題の改善のための取組の方向性

本校の生徒は、明るく素直で活発な生徒が多い。これは、新校舎が完成など、恵まれた教育環境の中で生活していること、また教職員の平均年齢が若く、活気ある学校体制が整っていることが一因であると考える。さらに、地域コミュニケーション科の取組により、様々な職種や年代の方々との交流を通してコミュニケーション能力が向上し、郷土への愛着を深め、多様な価値観を身に付けた生徒が育ってきていると感じている。一方で、4-(1)に示したように、学校の教育活動を離れたところでの地域貢献に関して、やや物足りなさを感じている。学習活動のみならず、日常生活や社会生活全般において主体的に行動していくために、本事業の取組をさらに発展させる必要がある。

そのためには、第一に、活動意義をしっかりと踏まえ、指導者をはじめ外部の者がその価値について、しっかり語っていくこと、第2に、特別の教科道徳や他教科との連携を図り、多様な価値観に触れ議論する機会を設け、生徒の道徳性やシビックプライドを養っていくことが重要である。以上の2点を横断的に捉えたカリキュラム・マネジメントを推進し、学校教育目標である「郷土に誇りを持ち、たくましく生き抜く生徒の育成」に尽力する。